

オトシモノミツケ屋



文・小原麻由美
絵・小島加奈子

黄梅の雨が降りやんで、オレンシ色の光がまぶしい夕暮れ時でした。

『オトシモノミツケ屋』

白樺の板に文字が彫られた看板の先には、雨粒をまとったカクアシサイの葉が、小径の半分まではみ出して艶やかに咲いています。その奥に、かやぶき屋根の古い家がありました。家の裏手にはつゆ草が茂る清らかな小川が流れています。

赤いキャップをかぶり、黒色のTシャツと短パンを履いた細身の少年が、玄関の前に立っていました。

少年が格子模様のガラス戸を引くと、ひと間の広い部屋がありました。天井からは大きな違う四角い箱が、いくつもぶら下がっています。

「何か落とし物をされましたか？」

天井裏から声がありました。

「あの……昨晚、小川の近くで小豆ほどの豆電球を落としましたよ」

少年の声は、どこことなく元気がありませんでした。

「小豆ほどの？ 今のところそれくらい小さな落とし物はぶら下がっていませんが」

「そうですか……また来ます」
少年は悲しそうに天井を見上げて、帰って行きました。

それから五日ほど経った夕方、少年がまたお店へやってきました。

「あの、まだ届いてはいませんか？ 小豆ほどの大きさの豆電球なんです」

「ええ、届いてはいません。誰かが拾ってはいないかと、あの日の夜のことを三日目や北極星にも聞いてみましたが、あいにくその日は雨だったので空から地上を見ることのできなかつたようなんです」

天井裏から声がありました。
「そうですか……」

少年はガックリと膝をつきました。

「今すぐに必要でなければ『小豆ほどの豆電球』と、窓ガラスに息をふきかけて、指で書いておいてください」

「いえ、僕には時間がありません。落とし物は僕らの命に関わることなんです。また来ます」

少年がそう言って帰ろうとしたとき、一

人の少女がお店にやってきました。

「これ、拾ったんですけど」

少女がポケットから取り出したものは、豆電球でした。それも小豆ほどの大きさの豆電球でした。

「五日くらい前に小川の近くでね、この黄緑と黄色とオレンシ色のきれいな光を拾ったの。塾からの暗い道を照らしてくれて……」

たの。塾からの暗い道を照らしてくれて……
「無事におうちまで帰ることができたの」
少女は少しバツが悪そうに、モジモジし始めました。
「あんまりきれいな光だったから、私のものにしたいと思ったけど、『誰かの大切なものかもしれないわよ』ってお母さんに言

われて……」

「それで、届けてくれたんですね！」

少年は目に涙を浮かべて叫びました。
少女は「うん」と、うなずきました。

「ありがとう！ お礼に見せたいものがあるの、今夜小川に来てください。たぶん今夜で最終になりそうなので……」

少年は豆電球を大切に握りしめて、お店を出て行きました。

三日月だった月が西の空に消え、今夜は新月の夜でした。少女はお母さんと一緒に、お店の裏の小川に来ていました。

少女は目を凝らして小川を見つめながら、少年を待ちました。すると暗闇にひとつ、ふたつと、黄緑色の光が灯りました。

光はいくつにも重なり、ちらちらとまたたきながら光っています。

「蛍よ！」
お母さんが小声で言いました。

「蛍？」
少女は目をクルリと見開きました。

黄緑色の光の群れは少しずつ空に舞い上がり、たちまち星空のように輝き始めました。

「蛍の光、とってもきれい……」
少女はうっとりとして、空を見上げました。

「あっ！」
少女が指した先には、黄緑、黄色、オレンシ色が重なり合った蛍の光がありました。

光はつゆ草の葉の上に舞い降りて、強く優しい点滅を繰り返しています。しばらくすると、光はゆっくりにゆっくりに薄んで見えなくなりました。
(おわり)

次回回は7月19日に掲載

文 小原麻由美 1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」(PHP研究所)、「キユンすけのおくりもの」(三恵社)がある。

絵 小島加奈子 1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。